

話題提供4 : 復興支援とアート 朝倉水害流木再生 プロジェクト

知足, 美加子
九州大学 : 准教授

<https://hdl.handle.net/2324/7403524>

出版情報 : NP0木の建築. 47, pp.11-14, 2018-09. NP0木の建築フォーラム
バージョン :
権利関係 :



〈話題提供4〉

復興支援とアート

朝倉水害流木再生プロジェクト

知足美加子（彫刻家、九州大学准教授）

復興支援とアートの役割について、私の方で三つにまとめました。一つ目は心の復興感。災害を契機とした不安や緊張の緩和と、レジリエンスをめざすものです。レジリエンスとは、何かが起こったとき、その状態から回復、適応し

前を向く力です。二つ目は地域文化の再評価と誇りを創造するということ。三つ目のアートの役割としては、忘却への抵抗、意識継続、関心を集めるということが重要ではないかということ、今日は三つについてお話ししたいと思います。

まず心の復興感に関して。私は中越地震（2004年）の被災地・山古志村の復興に、アートを通じて関わったことがあります。2016年の「復興計画長期検証」のなかでは、「市民の感覚的な復興感」が重要であり、そこから復興が現実化することが報告されています。

熊本震災（2016年）の際、安藤邦廣先生を中心に、杉岡世邦さん、九州大工会、ボランティア等の方々が協働して、「ちいさいおうちプロジェクト」を行いました。熊本震災では、度重なる余震から車中泊する被災者が多く、健康問題が深刻化する傾向にありました。そのため、被災者の自宅敷地内に板倉構法による避難小屋を建てることを提案し実行しました。東日本大震災で被災した福島の建築家の方が熊本地震をうけて、「震災の時は、その人に寄り添い心の叫びを聞き、見えないものへの想像力を養うことが大切である。建築家である前に人であれ」と言われました。サービスとホスピタリティ以前に、まず寄り添ってほしいということ投げかけられてきたことを思い出します。これは「ちいさいおうちプロジェクト」として、2日間で板倉の避難小屋を建てた様子です（図28）。また、森と暮らしをつなぐ復興住宅というコンセプトのもと、子供達と森づくり体験「西原村宮山ヒノキの伐採、枝落とし体験ワークシヨップ」を行いました。子供たちと枝打ち体験をして枝の先に肉を巻いたりしました。森への意識を高めることが森林資源の活用を促し、防災に繋がる森づくりを可能にするメンバーは考えていました。

その矢先に、今回の九州北部豪雨災害が起こったわけです。私は九州大学災害復興支援団の一員として、朝倉の杉岡さんに同行していただき調査に参りました。杉岡さん所有の森林も甚大な被害を受けていました。「いのちと

しての木を活かしてあげたい」という彼の言葉を受け、クリエーターとしては何ができるのかと考えました。私は彫刻家でございますので、災害流木を活かした活動（災害流木再生プロジェクト）を中心に支援を行いました。樹齢132年のクスノキの流木を使って彫刻「朝倉龍」を制作しました（図29）。龍がもつ如意玉珠（にいほうじゅ）は水を治めるという力を表すそうです。子供たちに水や木を嫌いになつてほしくないと願い、龍をモチーフにしました。統廃合される4つの小学校は創立144年の歴史があり、何世代も地域住民に共通の話題を与える「地域の精神的支柱」でした。その時間を記憶した木を使うことで、住民感情の連続性を守りたいと思います。彫刻は、新設朝倉市立杷木小学校に寄贈されます（7月）。

また、知見研究室では、学生達がデザインした災害流木しおりをフリーマーケットアプリによって販売し義援金にあてる活動を行いました。これを通じて私が思ったのは、木の香りと手触りには人を癒す力があることです。

流木への恐怖の緩和として、良質なデザインとともに、杉材に直接触れ、香りを味わうといった五感へのアプローチが有効であることがわかりました。災害流木しおりは、統廃合によって閉校となる小学校名と校章を刻み、被災地児童にもプレゼントしています。

さらに災害の倒木を使って、旧朝倉市松末小学校「松末の木と石の時計作りワークシヨップ」を行いました（図30）。

松末にある杉岡さん所有の森からレスキューされた杉材を丸太田盤にし、九州大学の藤本登留先生が乾燥してくださいました。校内の複数の時計が災害の影響で止まっていたことから、子供達の手の中で木が大切なものとして生まれ変わわり、新しい時間を刻んでほしいと発想したものです。本ワークシヨップは、参加者が主体的に対象に手間と時間をかけることによって、負の感情を受容や愛情へと導く可能性を示してくれました。

二番目（地域文化の再評価・矜持の創造）です。私は英彦山修験者の子孫でございます。明治に入るときに修験道と

いうのは大変な弾圧を受けて、知足院も還俗して知足姓となり今に至っています。英彦山の修験道文化が木を崇敬し、また今回の被災した地域とも関わっていますのでお話しさせていただきます。

英彦山修験は三大修験のうちの一つです。最も特徴的な点は、自然が神や仏であるという考え方の下に、自然を崇敬し、自然を核にしていろんな思想を習合する点です。習合とは、独立性を担保しながら互いを尊重し習い合うという考え方です。修験道は擬死再生を目指し、仮の死を経て生まれ直すという出生灌頂（しゅつせいいかんじょう）という修行を行います。修験は口伝傳承の掟があり文献資料はほとんどありませんが、この秘儀の際、先祖を思いながら枝（柴）を投げたといわれます。これは、一度折られて死んだ枝が、土に植えられる（挿し木）ことで新しい命を授かる、という起死再生の概念を表現しているのだと私は考えています。中世まで、現在の被災地域ほとんどは英彦山神領でした。山籠の東峰村には、今も行者杉が375本残されています。英彦山修験は、九州の挿し木文化に影響を与えているのかもしれない。

英彦山の歴史は古く、ズイベガ遺跡という縄文時代（紀元前9千年）の遺跡が存在します。縄文人は採集を重んじ、植林の文化をもっていたといえます。木や水を中心とした山伏の自然護持の姿勢は、「四土結界」という思想にも表れています。結界とは、五穀栽培禁止といった宗教的忌避を伴うゾーニングのことです。昔の山伏は、殺生を避け松の実を食べて修行したそうです。英彦山修験は、古くから木を守ってきました。鬼が植林したという鬼杉は樹齢1200年と言われています。

山の自然全体が神仏でありますけれども、最も重要視されたのは水でした。英彦山は「水分の神」と言われ、水を守ることは山伏の重要な使命でした。今回の災害は、木や水を大切にしてきた文化圏の中で起こったのです。

このような文化的背景をふまえ、被災地（朝倉市黒川地区）で英彦山修験道と禪に習い、「復興ガーデン」とバイオアー

ト」プロジェクトを行う予定です。災害流水、流石を活かし、命を潜思する庭を創るといふものです。英彦山には雪舟がつくった国指定名勝の雪舟庭園（禪庭）があります。

九州北部豪雨災害は、文化財被害の4割が天然記念物の樹木でした。英彦山山籠の樹齢約300年のヤマザクラも被災しました。この倒木を英彦山修験道文化に関連する「花開童子」をモチーフに彫刻制作します。

先ほど、杉岡さんのお話の中でも紹介していただいたのですが、個人の活動として被災地にヤマザクラを植樹しました。その際、杉岡さんが「芸術」の「芸」の象形文字は木を植える形である、おっしゃってくださいました。本当にその通りだな、と思います。木を植えるということは、人間に不思議な想像力を与えることを実感しました。木の文化的な価値とは「命そのもの」と、「自分の命を超える時間への想像力」を与えてくれることなのです。今まさにそのことを、私達が身体的に理解することが大事なのではないのでしょうか。

三番目のアートの役割として、「忘却への抵抗」について私が行ったアートプロジェクトを中心にお話しします。

「二風谷プロジェクト」これは、北海道の二風谷ダムというところで、水の下から空を見上げている女性の像（大理石）です。二風谷ダム裁判原告であるアイヌ民族の貝澤耕一さんという方と協働しながら設置したものです。「中越地震復興支援」山古志村では、地震により大規模な河道封鎖を起し、全村民がヘリコプターで離村しました。避難の際、動物は連れていけませんでしたが、それまで大切に育てた角突牛を置いていかなければならなかった被災者のお気持ちに寄り添い、牛の木彫を制作・寄贈しました。

その後、養鯉業がさかんな山古志村のために錦鯉の作品も寄贈しました。「東日本大震災」東日本大震災後から、福島助産施設に福岡の無農薬野菜を毎週送る「福岡エルフの木」という活動を続けています。熊本震災後からは、熊本野菜を送っています。この活動は長く続けることを目標にしています。災害への意識はメディアが報道しなくな

ると次第に薄れ、解決したような錯覚を与えてしまいました。福島に毎週野菜を送っている、復興はまだ進行形であることを実感します。熊本震災のときには、支援先の方々がいち早く支援に関する助言をくださいました。例えば避難所には、妊産婦さんや、子供連れの方、障がいのある方のためにパーティションが必要なことなど、避難所生活を経験された方だからこそ貴重な助言をしてくださいました。災害後、長く支援する気持ちを送り、コミュニケーションを続けるための仕組みとして活動を行っていました。この彫刻は「望郷の牛」(図31)といって福島第一原発事故の立ち入り禁止区域(浪江町)の牛をモデルにした作品です。災害直後、無人となった浪江町をさまよっている牛たちの映像をみました。牛たちの姿に、失ってしまった日常の風景、帰りたくて帰れないという望郷の想いを感じました。いつ戻れるのかわからないけれど、日常が戻るその日まで、被災地側から見ている視点が残ってほしいという気持ちで制作しました。この作品は今、「希望の牧場」という、立入禁止区域で牛を殺さずに育てている牧場に寄贈しております。

以上、復興支援とアートについて、心の復興、地域文化、意識継続という三つの観点からお話しました。ここで創造性の大切さをお伝えしたいです。「ちいさいおうちプロジェクト」のように、「協働で創造する」という、その力が復興そのものだと思っています。創造は無から生まれるのではなく、様々な組み合わせから生み出されます。創造のプロセスを通じて、失ったものに思いを馳せながら、それからを活かし組み合わせ、新しいものを生み出す自信を得ることができます。創造には人間の心が含まれています。心でイメージすることから現実がはじまるのです。創造は、巻き込みやセレンディピティ(偶然の幸運)、それと能動的な動機を生み出します。互いに習い合い、協働で創造するエネルギーが復興を前に進めるとというのが私の結論でございます。

修験道では、現実の自然をよく観察・体感し、目にみえな

い繋がりに対する想像力を養いました。ネット社会に生きる現代の私たちには、その想像力を培う体験が圧倒的に足りないと思います。現実には即した繋がりに向けた想像力が、それが、復興を推し進める起点となります。修験には「代替苦」という言葉があります。その人が受けるべき不幸を自分の身に受けて昇華することを指します。他者の苦しみを我が身に引き寄せ、愛をもって利他的に発想し行動すること。復興支援とアートのお話をさせていただきましたが、その本質は愛なのかな、と思います。